

東北視察 陸前高田市と旧大川小学校を見て

嘉藤 剛

1. はじめに

東日本大震災が起こってから、もう2年以上の月日が流れた今年9月ようやく東北を訪れる機会がやってきました。しかし、2年も経って、今更見にいつて何になるのか？今、県内で起こっている災害は？などと自問しつつも、いつか必ずこの目で見に行きたいという思いは強く、せっかくのチャンス。無理を言って見に行くことができました。

巡った先は陸前高田、気仙沼、南三陸、女川、石巻、東松島でしたが行くところ、行くところ2年半たってもその衝撃は自分にとってはすさまじいものがありました。その中でも、より自分の心に残っている陸前高田市と旧大川小学校について書かせていただきます。

2. 陸前高田を見る。

視察がスタートして最初に訪れた地、それが陸前高田市でした。この地は自分が一番行ってみたい場所でありました。それはあの日、東日本大震災が発生し、その後ニュースにくぎ付けになり、一番衝撃を受けたフレーズがニュース速報による「陸前高田市壊滅的被害」だったからです。その時陸前高田市の規模を知っていたわけではありませんが、市が壊滅するってどういうことだと。東日本大震災の、事象の深刻さをまず知らされた場所が陸前高田市でした。ちなみに、陸前高田市は、面積約232km²で震災発生前の人口が23200人(2010年)と、島根でいえば江津市と近い規模になります。(面積約268km²人口24690人「2013年推計人口」)



図-1 陸前高田市位置

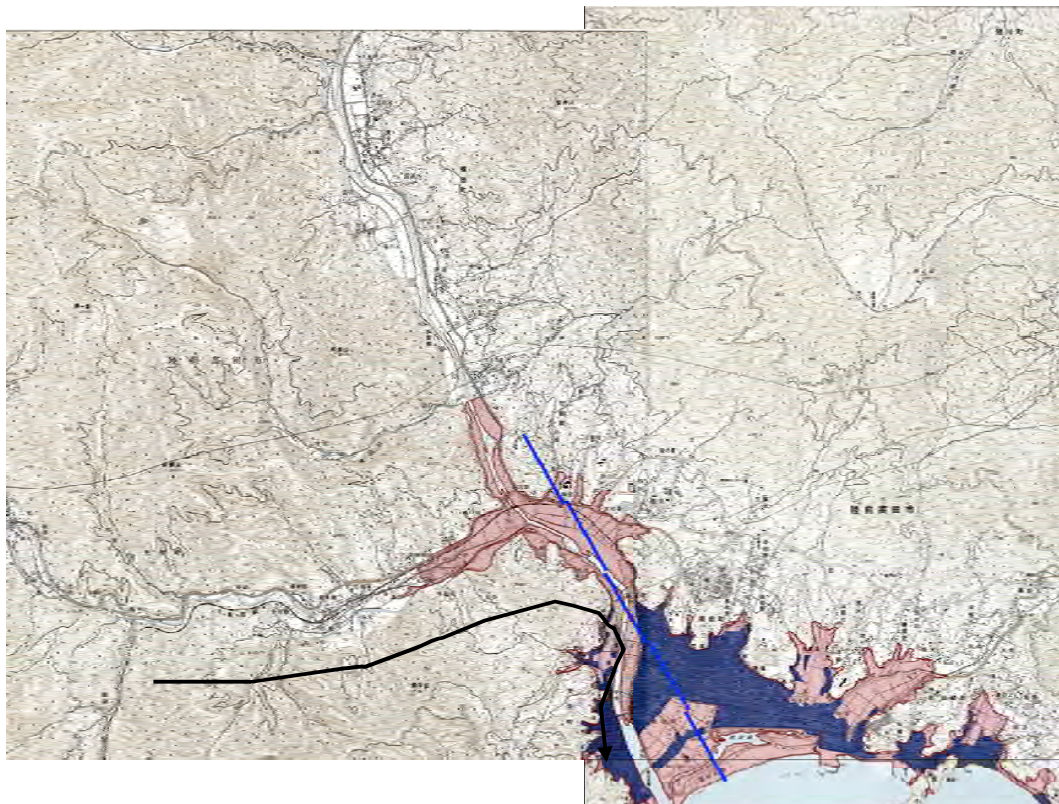


図-2 陸前高田市 津波浸水マップ

津波浸水マップによりますと、津波は川を 5km 以上遡上しこの地に影響を与えています。

陸前高田市へは岩手県の内陸側から入る形となりました。内陸の国道 343 号線～340 号線を下るとまだ、海なんて見えないのに、津波により破損した施設がありました。そこはまだ海から 5km ほど離れた場所。川を遡上してきた津波の影響の様です。その後、丘を登ると高台にプレハブの大きな建物があり、そこが陸前高田市の役所庁舎でした。結構山の中にあると思いましたが。そこから海に向かい下ること数キロ。建物はありませんでした。山際に残った家がありましたが、平地にはなにもありませんでした。あるのは、瓦礫の山と重機。



写真-1 走行中に見えた更地



写真-2 瓦礫処理する重機



写真-3 更地となった区画



写真-4 山積みとなった瓦礫

しかし、更地なのは、復興に向け動き出しているからです。
山頂では、下からは小さく見えたが、重機が高台移転に向けて稼働しており、調査中のボーリングやぐらがあります。陸前高田の復興計画は進んでいました。



写真-5 復興に向けた Bor 調査



写真-6 山頂に見られる重機

今後移転された先のコミュニティーや役所や病院とのアクセスなどの課題が生まれてくるとは思いますが、そこを乗り越え防災都市として、復興されることを願っています。

陸前高田市には復興のシンボルとして奇跡の松があります。震災の悲惨さを伝えるだけではなく生き残った物、復興の力として立っていました。

この地には私たちの他にも多くの方が訪れておられ、ここに来るのに遅いってことはなかったかもしれないとちょっと安心した瞬間でもありました。

はやく奇跡の松の周りに建設機械が役目を終え、静かな日常を取り戻す日が来ることを望みます。



写真-7 海岸にそびえる奇跡の一本松

3. 旧大川小学校に止まる。

視察 2 日目には、石巻市の旧大川小学校を訪れることができました。この地は児童、教職員 84 名が亡くなった悲劇の場所です。この地を来たら、足が止まり、身震いしました。



写真-8 高台から旧大川小学校を望む

小学校は北上川の近傍にあり、堤防により川の様子はうかがい知ることができず、さらには海の様子は当然見えません。この地は、海から 4km 離れており、いままで津波被害が認識されておらず、津波の浸水予想図からも外れていた。また、小学校における、津波発生時の避難所は「高台」としか掲示されてなかったという話もあり、同地区が津波に対して無防備であったことが推察される。さらには、今は草地や更地となっているところには震災前に宅地が存在していたことがわかったが、同宅地に住まいされた方々はどのように避難されたのか、はたまた津波に飲み込まれたのかこちらも気になるところである。

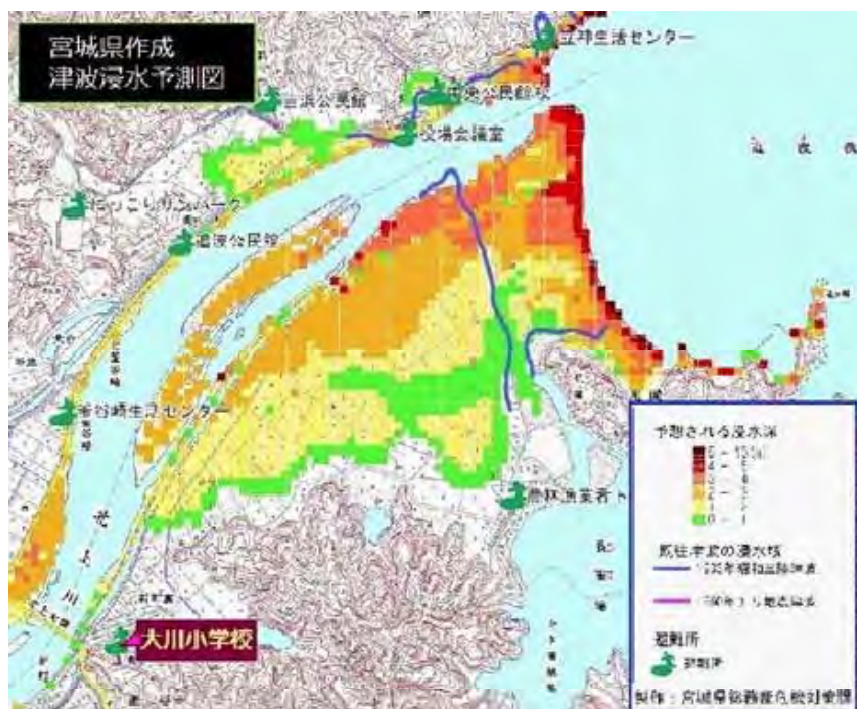


図-3 津波浸水予測図（宮城県作成）



写真-9 高台にある慰霊碑



写真-10 旧大川小学校跡地

小学校進入路にも霊碑が建立されていた。旧大川小学校の建物の周りには立ち入り禁止のロープが設置されており入ることはできなかった。また、ここから先へは部外者の侵入を許さないという雰囲気を感じ取れました。

4. 悲劇も奇跡も起こさぬために

旧大川小学校で起こってしまった悲劇により、先生と保護者との争いが起こりました。当初私は、先生たちを責めてもしようがないじゃないかという思いでしたが、実際に旧大川小学校を訪れてみるとその思いは、自分の子供を守れなかった自分たちの無念さから起きているのではないかと考えられ、言いようがなくなりました。旧大川小学校より海に近い学校では、全員が助かっていることもその気持ちを大きくしている要因となっていると思います。

この悲劇と対比するように挙げられる「釜石の奇跡」は、2008年からスタートした防災教育により釜石市の小中学生の生存率 99.8%を実現した。(釜石市の人口当たりの死亡率 2.63%) これには、子供たちはもちろんのこと学校職員の意識改革から着手されており、「想定にとらわれるな」、「最善をつくせ」、「率先避難者たれ」の3つの教えを浸透させ、自主的な避難行動につなげたことが大きい。そして教育開始から3年目にこの見事な結果につながった。

その反面、同じ釜石市内で間違った教育・避難訓練により津波避難所ではない施設に避難し、200名以上もの津波犠牲者を出し「釜石の悲劇」とも言われる、鵜住居地区防災センター避難での津波被害が発生しています。

避難訓練の参加者減少に頭を悩ましリーダーが避難しやすい場所に当地を選んだことにより、参加者が増えそれにより間違った避難知識が広まりより多くの人命が失われた。

正しい目的をもった避難訓練・防災教育が大切であることを感じさせた。



写真-11 鵜住居地区防災センター跡

2階建てであり、津波避難施設ではなかった。

これらの事案から私たちは、子供たちをそして自分たちを悲しめないためになにをすればよいか学ぶことが大切だと思います。まずは自分たちに起こりえる災害リスク、避難箇所、避難行動のタイミング。この3点が重要だと考えます。

県内で起こりうる災害は、地震と豪雨による土砂災害と水害が想定されます。

避難箇所については、各市町村においてハザードマップが作成され避難所が記載されている物と思います。大切なのは、その避難所がすべての事象において避難所か？を考えることです。地震時、土砂災害時、水害時において果たして安全なのかを考慮する必要があります。

避難行動のタイミングについても発生する災害により異なりますが、地震時と豪雨時では準備が変わります。とくに豪雨時、特別警報発令後は「ただちに命を守る行動」が求められています。実際には、特別警報発令時に移動することは無謀ともとれる行動となり場所によっては早めの行動や身近でより安全な場所を考えておく必要があります。島根県においては2013年に数十年に一度といわれる特別警報級の降雨が2度発生しており、場所を変えれば本年も特別警報級の降雨が発生する可能性は否定できない。地震は365日いつ起こるかわかりませんので、一年中災害リスクを考え行動することはシンドイと思いますので、年一度くらいは、身の回りの災害対策や家族間の連絡の取り方等について、話し合う時間を取ることも必要ではないかと考えます。災害に対して、当事者意識を持ち、いざという時の正しい準備をしておくことが奇跡も悲劇も生まないための一番の方法と思われ、少しでもその手伝いができればと思います。



5. おわりに

当初、最終日に仙台から南側を視察する予定でした。しかし、初めて特別警報が出される事態となった台風18号の襲来により、予定を変更せざるを得ませんでした。やはり、忙しい時期に行った天罰なのかとも思いましたが、一度来て満足するんじゃない、復興はこれからだから、まだまだ見に来いとの思召しと考えることにして、今後も機会を作って東北へと足を運びたいと思います。

(今回、海鞘も食べてないですし・・・)